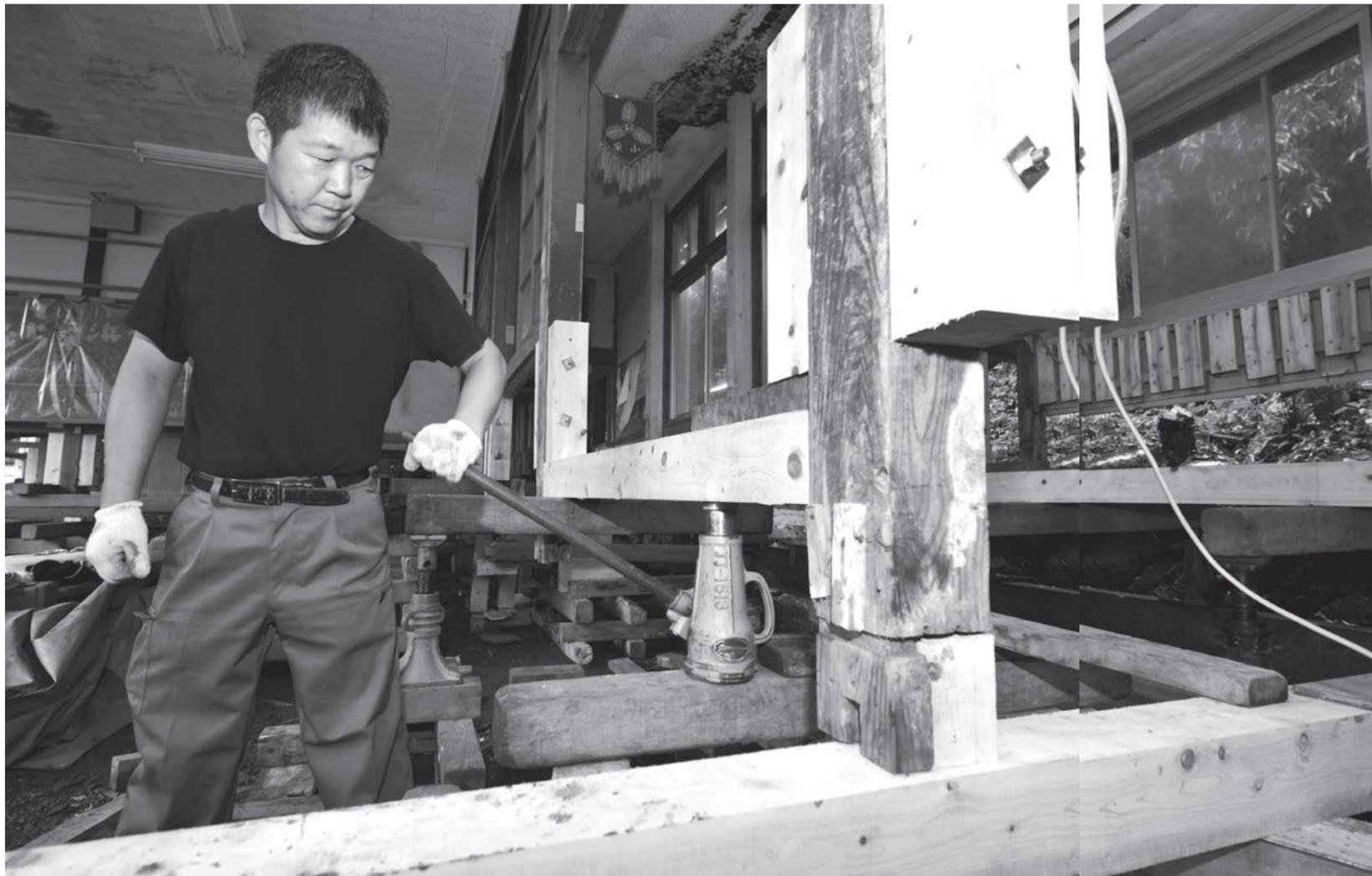
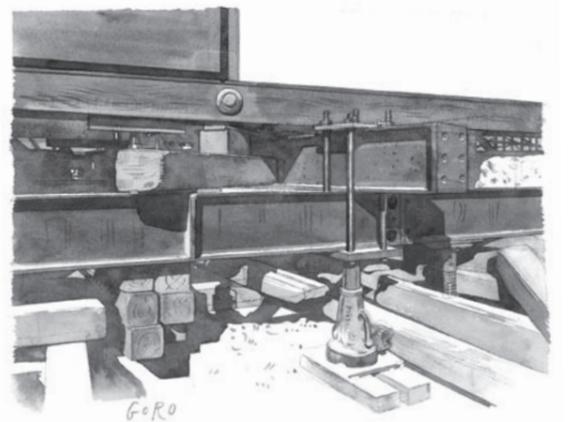


# 曳家職人 — 岡本直也 [前編]

一般的に「曳家」といえば、読んで字のごとく、家屋などを解体することなくそのまま移動させ、別の場所に移築する工事を指す。しかし広い意味での「曳家」には、基礎の沈下修正や土台の改修などさまざまな工事が含まれる。かつて曳家職人が隆盛した高知に生まれ、今は数少ない職人の一人として全国各地を回る岡本直也に、曳家の置かれている現状を聞いた。



旧桑浜小学校（石巻市）の沈下修正の現場。傷んだ柱の下部を基礎からやり直すため、複雑な工程を踏んで建物全体を浮かせなければならない。



土台のジャッキアップ

## 「台風銀座」高知で発展した曳家の技

今や全国でも希少な曳家職人・岡本が生まれ育った高知は、昔から「台風銀座」と呼ばれ、台風や高潮の災害が頻発する土地だった。

「小学生のころ、台風一〇号の高潮で家が一八〇センチくらい浸水したんですよ。二階の物干しから自衛隊の人に助けってもらったり、家が水浸しだから学校の体育館で避難生活を送ったり」

木造の家の場合、床下まで浸水すると土台部分が腐食などによって傷むため、土台の改修が必要になる。場合によっては、地盤沈下で傾い

た基礎を直す「沈下修正」も行う。こうした建物の基礎部分の改修・補修全般を請け負っていたのが高知の曳家職人だった。

「自分が若いころで、高知に二〇社くらいありました。家を曳くのに端太角じゃなくて仮設の鉄骨を組んで、レールを下に敷いて曳いてました。今でこそ常識ですけど、三十数年前の当時、高知の曳家技術は全国でもトップクラスで先進的だったと思います」

その高知の秀でた曳家工事の技が、ある時を境に衰退していくことになる。

「自分が二〇歳くらいのころまでは、道路拡張に合わせて家を後ろに曳くっていう工事が多かったんです。でもそれが実費補償に変わって、どうせお金ももらえないなら建て替えた方がいいっていう話になって…。曳家はその時に全国的に激減したんですね」

## 震災ごよみ「躍」注目の技術」

工業高校を出てから父を手伝うようになり、曳家の道に入った岡本だが、最初から疑問もなく跡を継ぐつもりではなかったという。

「工業高校を進路に選んだ時点で『もしかしたら親父の跡継ぎのかな』とは思ってましたけど、曳家なんてやっぱりダサいし汚いし疲れるし…。若い時だからホワイトカラーへの憧れも



おかもと・なおや●1960(昭和35)年、高知県高知市生まれ。大工だった父は地元の曳家職人の下で働いて跡取りとなる。その父に19歳から師事。27歳で家業を継いで曳家の親方となる。東日本大震災以降、拠点を千葉に移して住宅の沈下修正工事を数多く請け負い、高知の曳家技術の名を広めた。メディア展開により、工法の理解促進も図っている。

## 「震災後の今、 数少ない技術者の一人として 世の中のために やるべきことがあると思った」

流施設として再生させる事業に参画中だ。同校は山の中腹にあるため津波被害は免れたが、老朽化が進み、土台が腐って最大二五五センチも沈下していた。

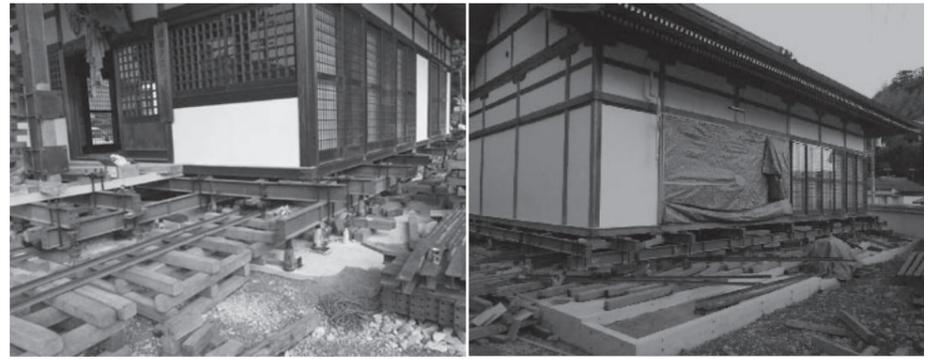
「今回は土台がないから、柱ごと上げてます。柱にボルトを通して添え柱をつけたり、枕木を逆丁字に通して両側でジャッキかけたり…。とにかく普段の工事とは段違いに手間がかかりま

す。でも、建物の水平レベルが修正されて廊下の鴨居が開いていたのがピタッと直ったのを見て、依頼主の方が子供みたいに喜んでくれた。ここで最初の信頼関係が築けましたね」

特殊な技を要する貴重な工法でありながら、真価が正しく理解されにくい側面を持つ曳家工事。岡本は、施主と、建物と、あくまで真摯に向き合うことでその難題をクリアしていく。



ジャッキ



左/土台の下にレールを敷いて建物を移動させる「姿曳移動工法(下腰工法)」。現在は施工例が少ない。右/文化財建築などの基礎を改修するため、枕木を組んで建物全体をジャッキアップする腰付移動工法(上腰工法)。いずれも代表的な工法だ。

ありましたよ。肉体的にもキツイし、本音は今でもやりたくない(笑)。でもやれる人がこんなに減って、しかもこの状況下で、持つてる技術を世の中に生かさないのはいけないと思って」

「この状況」とは、平成二十三(二〇一一)年に発生した東日本大震災で、千葉県浦安市を中心に大規模な液状化現象が起きたことだ。

「予定してた仕事で震災でキャンセルになってどうしようかと思つてたら、ウチのホームページを見た浦安市の市長さん本人から電話がかかってきて、相談に乗ってほしい、と。現地に行つて、取りあえず一軒目を直してる最中にもう評判になって、そこから約一年、自転車でもちよつと出かけただけで六、七人から声かけられるくらい、途切れなく仕事が舞い込みました。あんなことは二度とないでしょうね」

結局、資材を高知から運び込んで仕事の拠点を千葉に移し、地盤が緩んで傾いてしまった家の土台をジャッキで揚げて、基礎を補修し水平に戻す沈下修正工事に明け暮れた。

しかし液状化の影響は広範囲に及び、被害住宅は約九千棟。到底一人の職人の手に負える数ではない。案の定「新規参入業者」が横行した。「そもそも、今どき家の土台を揚げる工事なんて誰も頼んだことないから適正な価格も知らないし、作業も床下に潜り込んで何やってるの

かわからない。職種そのものがブラックボックスみたいなんなんです。とりあえず土台ごとジャッキで揚げて、間をモルタルで詰めて上塗りすれば直つたように見えるけど、我々の方法とにわか業者のやり方じゃ、強度に雲泥の差がある。でも一般の方にはそれがなかなか伝わらなくて、単なる価格だけの比較になっちゃう」

曳家の経験が乏しい業者が見よう見まねで参入して粗悪な施工を安価で請け負い、曳家職人全体の評価を貶めていることが許せなかった。

「中には『風窓とか人通口にジャッキをかけるから基礎を傷めません』とかアピールしてる業者がいる。窓とか人通口つてのは本来家の荷重を持たなくていいから穴が開いてるわけで、そんなところにジャッキかけて持ち上げたら家が傷むのは当たり前。家のことが何もわかってない」

「自分たちみたいな船大工・宮大工の系統の曳家職人は古民家とか寺社仏閣も扱うから、建物を傷めないように極力いいねいにやるんです」

### 被災地の旧校舎を甦らせる

現在の岡本の現場は、東日本大震災後の津波で甚大な被害を受けた宮城県石巻市。公益社団法人「sweet treat 311」が主催する「海と山の学校」プロジェクトの一環で、同市雄勝町にある旧桑浜小学校(二〇〇一年閉校)の校舎を交